令和3年（2021年）10月29日（金）　合志楓の森中学校２年３組新聞「楓の軌跡」

楓の軌跡

恵楓園の歴史を歩く

ハンセン病問題啓発ＤＶＤ

ハンセン病問題学習　正しい知識で理解深めて

菊池恵楓園　箕田誠司園長に聞く

新型コロナ感染拡大に伴い、現在菊池恵楓園は見学を中止している。そのため自治会では、園の歴史やハンセン病問題について学習してもらおうと、啓発ＤＶＤを作成した。私たちは早速それを鑑賞し、さらに詳しく学ぶために箕田誠司園長に話を伺う事ができた。恵楓園の歴史や、なぜ差別がうまれたのか詳しく知ることができた。

私たちは「なぜ国は隔離政策を行ったのか」「なぜ差別されなければならなかったのか」「菊池恵楓園の歴史や入所者の方々の生活」「楓の森小中学校にどのような思いを持っておられるか」などについて、より深く知ることができた。

日本は富国強兵の流れの中、外国から注目をあびていたため、ハンセン病患者を隠す手段として、一九〇九年に九州七県連合九州らい療養所を開設し、一九四一年に、「国立療養所・菊池恵楓園」へと名称を改め、現在に至っている。患者を療養所に強制隔離したり、患者の家を消毒したりすることで、「国が法律までつくって隔離するのだから、ハンセン病は感染しやすい怖い病気」という考えが広まった。

また、治療薬が使用されるようになるまでは、発病すると病気が進行することが多く、後遺症から不治の病であるとか発病が一定の家族内に多く遺伝する病気と誤解されていたことなども差別されてきた理由にあげられる。

さらに、一九四八年から始まった優生保護法という法律で、女性の患者さんに強制的な不妊手術を受けさせるという差別もあったそうだ。そんな中でも、法律を変えようと立ち上がった患者さんがいた。長い戦いの末、平成八年に「絶対隔離」と「優生保護法」は廃止された。これに続き、患者さんとその家族の人権を守る法律がつくられたそうだ。

箕田先生は、恵楓園の将来の課題の一つとして、ハンセン病の教訓をどうやって伝えていくべきかがあると言われた。

菊池事件再審を求めて署名活動

差別が今も残っているハンセン病。その中でも、今も闘い続けている人達がいる。「菊池事件」の再審開始を求める活動だ。菊池事件とは、ハンセン病患者である男性が殺人罪などに問われ、隔離された特別法廷で裁かれて死刑が執行された事件である。菊池事件は第一事件と第二事件とからなる一連の事件を指している。ハンセン病患者の男性は第一事件で殺人未遂、火薬類取締法違反の疑いで逮捕され、第二事件で単純逃走、殺人の疑いで逮捕された。ハンセン病患者の男性は、第一事件、第二事件の犯行を否認したが、殺人罪で起訴がなされた。

一九六三年九月十四日、ハンセン病患者の男性は福岡拘置所に送られて、死刑執行された。この死刑執行において通常の例と異なる点が二つある。一点目は、本人が再審請求を行っている事件で死刑が執行されることは、法律上は禁じられてはいないが通常はないところだ。二点目は、死刑執行に対する配慮が著しく欠けていたというところだ。この事件は、通常の事件と対応が異なる点が多いと考えられる。現在、弁護団は男性の無実を訴え、国民に署名活動の参加を呼びかけている。署名活動は今年一月から始まり、現在計三万二九八七人分の署名を熊本地裁に提出している。弁護団は事件をより多くの人に知ってもらおうと、男性の命日に合わせてシンポジウムや模擬裁判などのイベントを催してきた。しかし、コロナ禍ではイベントが中止になってしまったが、ユーチューブで連続公開講座を開いている。今後も注目したい。

向咲月咲香空加
陽衣葉海美蒼愛
島、穂　本田
村久山村
木多中西東福前

箕田先生が恵楓園の歴史についてお話しされている様子

感染対策をしながら話を聞いている様子

また、私たち楓の森小・中学生や、私たちの世代だからこそ、「ハンセン病のことを入口にして、人権に対する理解を深めてほしい」とも話されていた。

菊池恵楓園入所者自治会　志村康会長、太田明副会長に聞く

私達は、ハンセン病について学んできた。その中でも入所者の方々の思いは、理解を深めていくための大切な情報である。そこで菊池恵楓園の入所者自治会の会長、志村さんと副会長、太田さんに質問をした。

志村会長さんへの質問

Q　生きようと強く思えた原動力は？

A　隔離の必要性についておかしいと強く感じ「収容所」の実情とギャップを正すという入所者の共感が結びついたから。

Q　菊池恵楓園の暮らしについて

A　「相互扶助」の精神。不自由者・盲人・弱者、動ける者それぞれに出来ることと、出来ないことを認めて、支え合って暮らしていた。

Q　私たちに望むこと・今の私たちの世代に伝えたいことは？

A　人との関係ではなく、自分自身の生き方を早く見いだすことだと考える。出来ないではなく、どうするかを考え自己実現に向かって頑張ってほしい。

太田副会長への質問

Q　どのような思いで暮らしてきたのか？

A　相愛互助の精神で軽症者が重症者のお世話をしてきた長い歴史がある。自治会は施設の運営を担いながら入所者の生活支援と経済支援を行ってきた。

Q　生きる希望や心の支え、楽しみは何だったのか

A　お互いの存在と自治会の存在は大きいものがあったと思う。

Q　私たちに望むこと・今の私たちの世代に伝えたいことは？

A　同地区で学ぶ者として、恵楓園の歴史やハンセン病問題について正しく理解し、さらに、学習を深めていただき、皆さんで恵楓園の自然と歴史を守っていただければ嬉しい。

志村さんや太田さんの思いを知ることができた。
その思いを私達が引き継ぎ、差別根絶を実現したい。

人権フォーラムin合志

二〇二〇年に「みんなで考えよう　ハンセン病問題」をテーマとした「人権フォーラム二〇二〇in合志市」が開催された。参加者は約五五〇名で、ハンセン病に対する偏見や差別を解消し、ハンセン病問題に関する正しい知識の普及啓発を図る目的で開催された。ゲストには俳優の竹下景子さんが登場され、参加者の心に響き渡る朗読が行われた。竹下さんは、ハンセン病療養所多磨全生園がある東京都東村山市の「しあわせ大使」をされている。多磨全生園で幼少期を過ごし、現在もハンセン病問題に高い関心を持って活動されている。そんな竹下さんが朗読された「希望の鐘」は、菊池恵楓園で初めての退所者を見送った時に、高らかに鳴り響いていた鐘をテーマにした曲で、朗読後は合志中学校合唱部が澄み切った声で歌った。トークディスカッションでは、たくさんの人がそれぞれの立場で取り組みや思い、考えを出し合った。竹下さんは、「故郷を離れ、長い間隔離された中で、差別や偏見と闘ってこられたことを思うと胸がいっぱいになる。無関心であってはならない。」などと思いを語られた。また、参加者の感想の中には、「私も自分にできることをしていこうと思った。」や、「恵楓園の近くに住む者としてこの温かい気持ち、人とつながっていくことの大切さをいつも心に持っていたい。」などが挙げられた。いじめや差別に対して無関心な心で捉えるのではなく、私達一人一人の問題として目を向け、居心地の良い世界にしていくべきだと思う。

夜空を彩る鮮やかな花火

とてもきれいな花火

十月一日に国立ハンセン病療養所菊池恵楓園で花火が上がった。三十分間ではあったが、夜空を彩る美しい花火であった。

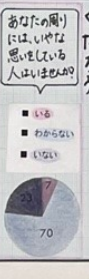
菊池恵楓園の花火は亡くなった入所者の鎮魂を祈って、約五〇〇発が打ち上げられた。毎年、園で開かれていた「納涼盆踊り大会」は新型コロナウイルス禍のため、二年連続で中止となったが、入所者が「亡くなった方の供養に」と寄付金を園の入所者自治会に寄せていたため、今年は事前告知を控えて花火のみを実施したそうだ。自治会の志村会長は「先祖の墓に参りたくても参れない人もいる中、友人のためにと寄付金が集まった。来年は盆踊りも開けるようにと願っている。」と話した。花火を見ている人々はたくさんの歓声をあげていた。

STOP コロナ差別

二〇二〇年一月頃から流行した新型コロナウイルス。それは私達の生活を大きく変えた。その中でも、問題となっているのがコロナ差別である。医療従事者や感染者とその家族などが差別や偏見により傷ついている。コロナ差別は、大きく三つの場合に分けられる。一つ目は、医療従事者やエッセンシャルワーカーとその家族への差別や偏見。二つ目は感染者とその家族への差別や偏見。三つ目は、思い込み、過剰な反応による差別や偏見が挙げられる。菊池恵楓園入所者自治会副会長太田さんは、「コロナとハンセン病の差別は類似しているが、コロナは急性の感染症、ハンセン病は慢性の感染症という違いがある。全ての人は病気、障害を理由にして差別してはならない。」と言われた。

校内人権アンケート結果

私たち合志楓の森中学校では、仲間作りについてのアンケートを行った。その中でも、これからの課題が見つかった。「あなたの周りには、いやな思いをしている人はいませんか？」という質問については、「いる」と答えた人はわずか七パーセント。「いない・分からない」と答えた人が合わせて九三パーセントと、大半を占めている。「いる」と答えた人の理由に、「いじり」と回答した人がいた。いじりはいじめの始まりになる。「いじっている人はふざけているだけ」と言うかもしれないが、はたして本当にふざけているだけなのか。自分がされたらどう思うのかと、考えて行動していくことが、楓の森中学校の課題になっていくだろう。



編集後記

この新聞を通し、菊池恵楓園や、コロナ差別に対する思いなど、たくさんのことを学べた。一枚の新聞を書くことに長い時間がかかったが、読者にどうすれば伝えたいことが伝わるか、読みたいと思ってもらえるかなど、グループで協力しながら頑張れた。記事を書くのに、ハンセン病についてのＤＶＤを見たり、菊池恵楓園の会長さんと副会長さんへ、メールで質問をさせていただいたりした。私達が今まで知らなかった知識を知ることができ、もっと理解を深めたいと思った。この取組から、差別に対して無関心でいてはいけないこと、ハンセン病の知識を、これからの世代の人達へ伝えていく代弁者になっていこうと思った。